

「死を想い、死を忘れない」ことを原点にした 復興論、災害社会学研究

このかん多く出されている震災研究や復興研究とは確実に一線を画する迫力を感じる

好井裕明

金菱 清 著

▶ 震災メモントモリ

第二の津波に抗して

6・20刊 四六判256頁 本体2400円

新耀社



「私たちが目撃あるいは体験した巨大津波本体を『第一の津波』だとすれば、本書で述べる『第二の津波』は、その後やってくる生活全般の過酷な再編と心身の苦痛を伴う耐えがたい経験である」。本書は副題にあるように、被災した人びとがいかにかして「第一の津波」に自らが生きる場

で抗い、生きていこうとしているのかを丁寧に調べ、聞き取り、人びとの実践や知恵、理屈がもつ可能性を論じた災害社会学の貴重な成果だ。突然の災害で奪われた身内の命の意味をいかに残された人びとが再び意味つけていくのか。遺体すら確認できていない「行方不明の死」もある。そうした「彷徨える魂」に

かに入びとが向き合い葛藤し苦しむのか。再び死者の意味を自らの生に落着かせようとするとき、コミュニティが過剰に「関与し、その営みを進めていくこと」になるのか。また、巨大津波でムラが奪われ、仮設住宅での暮らしを余儀なくされている人々が生きなおすために、手作りの祭礼をいかに実践していくのか。「復興」の美名のもとに、地域の外から様々な「改革」が提起され、地域を作り直そうとする動きがある。しかしそれらは、日本という国家が強くなることに意味があるかもしれないが、決して被災した当事者にとって「生きやすい」「改革ではない。だからこそ、被災した人びとは、自らの生活の場所を守るために、いかなる論理を駆使し、抗おうとするのか。なぜ人びとは災害リスクのある故郷にとどまろうとするのか。

「この三年間(2011年3月11日～2014年3月11日)は、被災者の語りがもつ力や、著者が出会い、そこから意味をくみ取ろうとする被災した人びとの語りもつ力と向き合うとき、限られた時間、被災地を訪れ調査し書かれた研究の「薄さ」や限界を感じざるをえないのだ。

震災の結果生じたさまざまなリアリティに向き合い、地域や人びとの暮らしの「復興」を模索し提起する社会学研究を行おうとするとき、決して忘れてはならないことがある。著者はそれを「メモントモリ」死を想うことである。死を忘れるなかれ」とい

う言葉に凝縮させている。大震災直後、人びとがまた自分の人生にいったい何が起ったのかを考え尽くしていない時期に、自らの被災体験を自分で記録してもらおうという営みを進め、『3・11 震災の記録』(新耀社)を世に送り出した著者。想像を超えようとなげく辛くひどい体験、それを語りだす声から目をそむけてはならないし、その声もつ意味から考え始めなければならぬ。災害社会学研究の原点が「メモントモリ」なのだ。

「復興」の美名のもとに、地域の外から様々な「改革」が提起され、地域を作り直そうとする動きがある。しかしそれらは、日本という国家が強くなることに意味があるかもしれないが、決して被災した当事者にとって「生きやすい」「改革ではない。だからこそ、被災した人びとは、自らの生活の場所を守るために、いかなる論理を駆使し、抗おうとするのか。なぜ人びとは災害リスクのある故郷にとどまろうとするのか。

震災の結果生じたさまざまなリアリティに向き合い、地域や人びとの暮らしの「復興」を模索し提起する社会学研究を行おうとするとき、決して忘れてはならないことがある。著者はそれを「メモントモリ」死を想うことである。死を忘れるなかれ」とい

う言葉に凝縮させている。大震災直後、人びとがまた自分の人生にいったい何が起ったのかを考え尽くしていない時期に、自らの被災体験を自分で記録してもらおうという営みを進め、『3・11 震災の記録』(新耀社)を世に送り出した著者。想像を超えようとなげく辛くひどい体験、それを語りだす声から目をそむけてはならないし、その声もつ意味から考え始めなければならぬ。災害社会学研究の原点が「メモントモリ」なのだ。

「この三年間(2011年3月11日～2014年3月11日)は、被災者の語りがもつ力や、著者が出会い、そこから意味をくみ取ろうとする被災した人びとの語りもつ力と向き合うとき、限られた時間、被災地を訪れ調査し書かれた研究の「薄さ」や限界を感じざるをえないのだ。

震災の結果生じたさまざまなリアリティに向き合い、地域や人びとの暮らしの「復興」を模索し提起する社会学研究を行おうとするとき、決して忘れてはならないことがある。著者はそれを「メモントモリ」死を想うことである。死を忘れるなかれ」とい

う言葉に凝縮させている。大震災直後、人びとがまた自分の人生にいったい何が起ったのかを考え尽くしていない時期に、自らの被災体験を自分で記録してもらおうという営みを進め、『3・11 震災の記録』(新耀社)を世に送り出した著者。想像を超えようとなげく辛くひどい体験、それを語りだす声から目をそむけてはならないし、その声もつ意味から考え始めなければならぬ。災害社会学研究の原点が「メモントモリ」なのだ。

「この三年間(2011年3月11日～2014年3月11日)は、被災者の語りがもつ力や、著者が出会い、そこから意味をくみ取ろうとする被災した人びとの語りもつ力と向き合うとき、限られた時間、被災地を訪れ調査し書かれた研究の「薄さ」や限界を感じざるをえないのだ。

震災の結果生じたさまざまなリアリティに向き合い、地域や人びとの暮らしの「復興」を模索し提起する社会学研究を行おうとするとき、決して忘れてはならないことがある。著者はそれを「メモントモリ」死を想うことである。死を忘れるなかれ」とい

う言葉に凝縮させている。大震災直後、人びとがまた自分の人生にいったい何が起ったのかを考え尽くしていない時期に、自らの被災体験を自分で記録してもらおうという営みを進め、『3・11 震災の記録』(新耀社)を世に送り出した著者。想像を超えようとなげく辛くひどい体験、それを語りだす声から目をそむけてはならないし、その声もつ意味から考え始めなければならぬ。災害社会学研究の原点が「メモントモリ」なのだ。

(日本大学文学部教授)